

コロナ禍2年目の良心館ラーニング・コモンズにおける学習相談利用状況と利用促進のための取り組み

学習支援・教育開発センター 助教 趙智英

1. はじめに

本稿では、同志社大学今出川校地の良心館ラーニング・コモンズアカデミックサポートエリアで実施した2021年度の学習相談の利用状況とその他の活動について報告する。コロナ禍も2年目となり、2021年度のラーニング・コモンズは一部エリアの利用制限をしつつ、通常運用に戻った。前年度に比べ、学生の利用も緩やかに増加している。このような状況の下、学習相談を軸としてラーニング・コモンズ内外で行ったアカデミックサポートエリアの活性化と学生の利用を促進するための取り組みについても総括する。

2. 良心館ラーニング・コモンズアカデミックサポートエリアの概要

同志社大学の良心館ラーニング・コモンズ（以下、良心館LC）は2013年4月に今出川校地にオープンした。京田辺校地には2018年4月にオープンしたラーネッド記念図書館ラーニング・コモンズ（以下、ラーネッド記念図書館LC）がある。両校地のLCには、コンセプトと利用目的が異なるエリアが複数ある。アカデミックサポートエリア（以下、ASA）は学習支援・教育開発センターの教員およびアカデミック・インストラクターとラーニング・アシスタント（以下、LA）が学習相談を行うエリアである。LCの公式ホームページには、「発想法や考え方、ライティング、人に伝えるプレゼンやコミュニケーション、資料の調べ方などをサポート」したり、「グループワークの過程で生まれてくるさまざまな技術的、現実的な問題に対して、専門的な視点からチュータリング」する場所であることが記載されている¹。ASAで学習支援に携わるLAは、全員本学の

研究科に所属している大学院生である。2021年度は任用期間が半年のみのLAも含め、文学研究科、社会学研究科、法学研究科、商学研究科、総合政策科学研究科、グローバル・スタディーズ研究科、文化情報学研究科、理工学研究科、生命医科学研究科、スポーツ健康科学研究科、心理学研究科（前期課程24名、後期課程6名）の大学院生が両校地のLCにて任用された。学習相談対応時間やLAの勤務体制などについては、趙・矢内（2021）を参照されたい。

3. 対面による学習相談利用状況

2021年度は対面による学習相談（以下、対面相談）と、Microsoft Teams（以下、Teams）やメールを使ったオンライン学習相談（以下、オンライン相談）を行った。オンライン相談は「おうち De LC 学習相談」と称し、両校地共通の窓口を設けて受け付けている。オンライン相談は、校地間の横断的な連携のもと、文系と理系を問わず相談対応をした（趙・矢内 2021）ため、校地を区別せず集計している。図1から図3は、2021年度（2021年4月1日～2022年3月31日）に良心館LCで実施した対面相談と、両校地のオンライン相談全体の利用状況を示したものである。

3.1 月別利用学生数

図1は、良心館LCにて行った2021年度の対面相談と、オンライン相談における利用学生の延べ人数である。ラーネッド記念図書館LCの対面相談利用状況については吉野ほか（2022）を参照されたい。

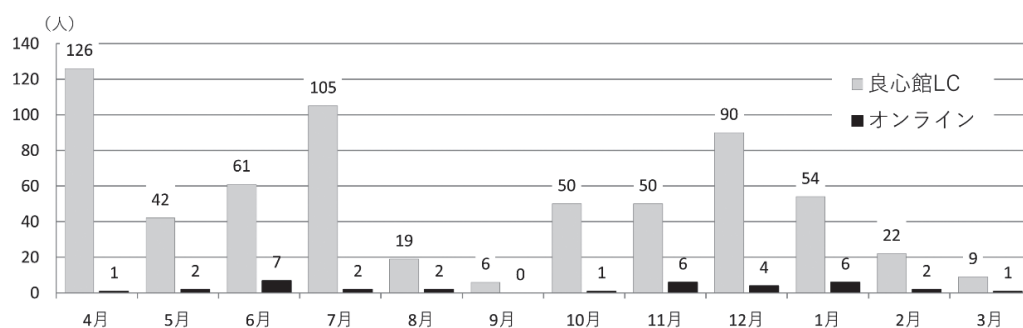


図1 良心館LCにおける対面相談とオンライン相談の利用学生数（月別）

2021年度は延べ634名が良心館LCで対面相談を利用した。前年度、対面相談利用者

数は延べ309名だったが、新型コロナウイルスの関係で7月末から対面相談を開始したことも影響している。コロナ禍前の2018年度（延べ878名）、2019年度（延べ929名）よりは少ないが、2020年度よりは各月の平均利用学生数は増加した。

月別にみると、学期がはじまり最初の課題が出る4月と、期末試験、期末レポート課題が多い7月に相談件数が大幅に増加している。その次に相談件数が多かったのは12月である。7月や12月に相談件数が増えるのは例年みられた傾向である。前年度は5月から開始したオンライン相談の件数が7月にピークを迎えている。その後、対面相談が再開してからは、良心館LCでの対面相談の件数は12月が最も多く（趙・矢内2021）、学習相談の方法が対面でもオンラインでも、需要が高まる時期は変わらなかった。

原則、LAは開講期間（2021年4月1日～7月27日、9月27日～2022年2月14日、休講日を除く）に相談対応をする。休講日や長期休暇中はASAの閉室、または教員およびアカデミック・インストラクターが相談対応を行っている。2021年度は8月7日から9月9日までの夏期休暇と、2022年2月15日から3月31日までの春期休暇の間も学生の利用があった。

3.2 学年別利用学生数

良心館LCの対面相談を利用した学生の学年別の延べ人数をみると、1年生が310名で全体の約48.8%を占め、群を抜いて多い（図2）。2年生が92名（約14.5%）、4年生が89名（約14%）、そして3年生が78名（約12.3%）である。全体の約8.5%は再修生や大学院生の利用（54名）である。前年度は1年生を差し置いて4年生の利用が最も多かったが、2021年度は例年通り1年生の利用が目立った。その他の内訳は、教職員、日本語・日本文化教育センターの留学生である。

対面相談を利用した学生の所属は法学部・法学研究科が最も多く（183件）、次に多かったのは文学部・文学研究科（123件）、商学部・商学研究科（119件）である。その他、社会学部・社会学研究科（55件）、経済学部・経済学研究科（53件）、グローバル地域文化学部（51件）、政策学部・総合政策科学研究科（28件）、神学部（4件）の利用があり、日本語・日本文化教育センターの留学生や、司法研究科、研究開発推進機構、全学共通教養教育センターなどの教職員の利用（11件）もあった。普段京田辺校地で学ぶ心理学部（5件）、グローバル・コミュニケーション学部（1件）、文化情報学部（1件）の学生の利用もあった。

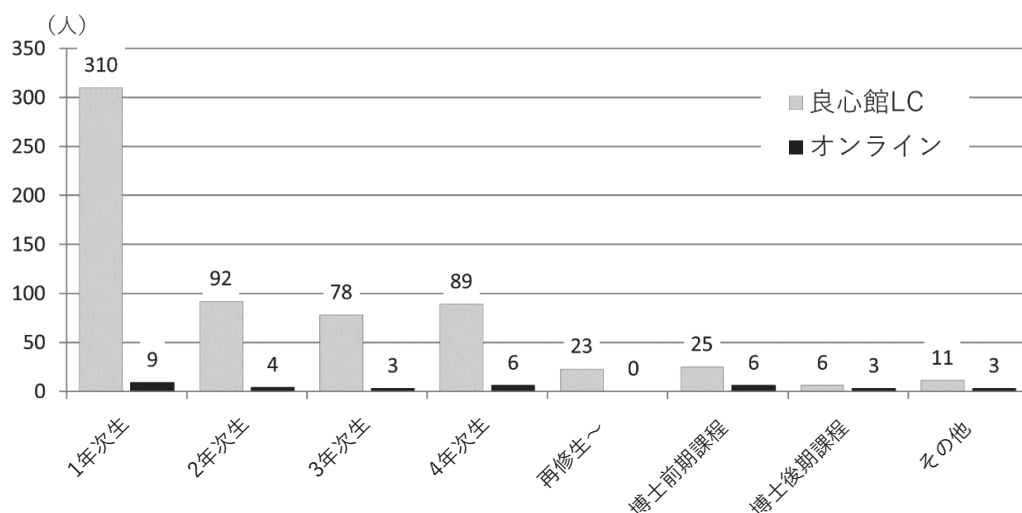


図2 良心館LCにおける対面相談とオンライン相談の利用学生数（学年別）

ASAでは相談者1人当たりの利用回数を集計している。2021年度に対面相談を利用した学生のうち、相談回数が1回のみの学生は239名で、277名の学生が2回以上対面相談を利用している。複数回学習相談を利用したリピーター率は相談者数の約33.1%を占める。最も利用頻度の高い学生は1年間で14回学習相談を利用している。学習相談を利用した学生に対し、利用アンケートや満足度調査は現在実施していないが、少なくともリピーターは学習相談に価値を感じている、学習相談が有意義なことだと認識しているのだと解釈したいところである。

3.3 相談内容の傾向

図3は対面相談の内容を分類したものである。なお、ASAでは2013年から相談が複数の内容に亘る場合であれば、複数の番号を取得し、分析している（岡部・鈴木2014）。例えば、学生から1回の相談でレポートの構成法とメールでの提出方法、レポートに引用する参考文献の入手方法について知りたいという質問があった場合は、A「レポートの書き方」とB「文献の調べ方」、N「その他」を振って集計している。そのため、学習相談の月別・学年別利用者の延べ人数より相談内容別の総数が多くなることを付記しておきたい。

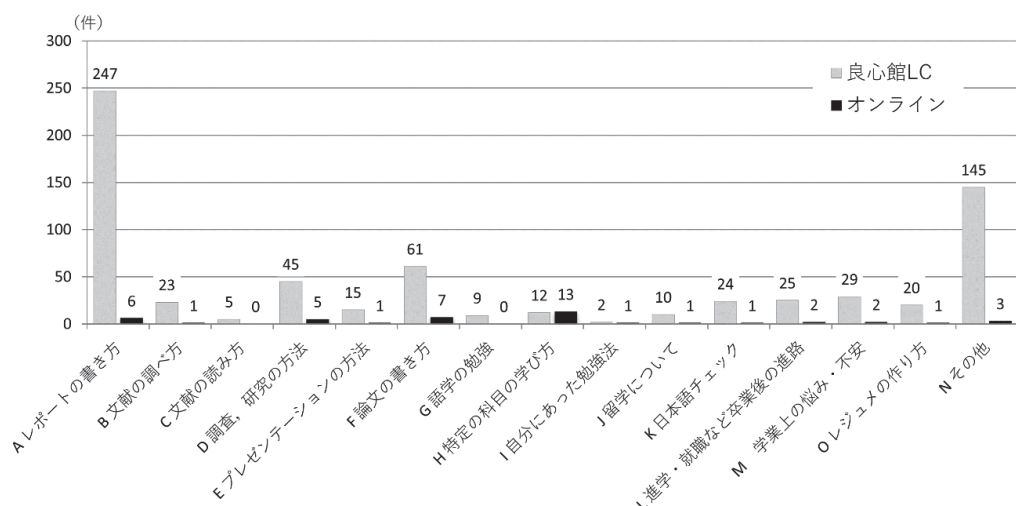


図3 良心館LCにおける対面相談とオンライン相談の内訳

2021年度の良心館LCでの対面相談の内容をみると、「レポートの書き方」に関する相談が247件と最も多く、次いで「その他」が145件と多かった。「レポートの書き方」、「調査、研究の方法」、「論文の書き方」は2015年度から7年間底堅い需要がある。2019年度、2020年度、2021年度は「その他」の割合が徐々に増し、「レポートの書き方」、「調査、研究の方法」、「論文の書き方」、そして「その他」の件数が他の項目より目立つようになった。

特に「レポートの書き方」は、例年相談内容の中でも大きな割合を占める。この項目は、レポート課題そのものに限らず、大学で学ぶ上で作成する文章や、一般的なレポートの構成で書かれた文章など、広義のレポートを含む。

「レポートの書き方」をさらに細分化すると、総数145件のうち72件と最も多かったのが引用の方法、出典、参考文献の書き方に関する相談だった。次いで、自身が書いたレポートの文章構成や日本語の表現、論理展開が分かりやすく示されているか見てほしいという相談や、指定の文字数に合わせるために文章をどう修正すればいいか一緒に考えてほしいという相談が62件と多かった。一方で、レポートとは何か、レポートには何を書けばいいかなど、レポートを書くにあたっての基礎的な質問も61件あり、同じレポートでも、本文を執筆する前の段階で相談に来るケースから、本文をある程度執筆した状態で相談に来るケースまで幅広く利用された。

レポート作成に使うWordやExcel関連の相談も15件あった。内容としては、Word

のインストールの仕方、Wordの使い方、脚注機能の使い方、ページ番号の挿入の仕方、セクションを区切る方法、グラフの作成方法、Excelのマクロ、関数についてなど、テクニカルな事柄がほとんどである。Word、ExcelをはじめOfficeアプリケーションにまつわる相談で、レポートに直接関係のない場合は「その他」に分類した。

WordやExcel関連の相談と同じ頻度で寄せられたのは、レポートの表紙の作り方、レポート執筆の際に使用する文献の探し方、レポートのテーマは決まっているが参考文献を読んでも理解ができない、著者の主張に対して反論したいがうまくいかない、筆が進まないなどの悩み（15件）だった。その他、課題が出されたが、課題の意図が汲み取れない、理解できない、授業担当者からの指示が確認できないという質問が8件、レポート、課題、書類の提出方法に関する質問が6件、英語レポートの書式についての質問が3件あった。

次は、対面相談において2番目に多かった「その他」の内訳を概観する。

「その他」に分類された相談の中では、授業の受け方、学生生活、友人関係の悩み、教科書の購入方法、成績評価について、大学の施設について、統計解析ソフトの使い方など（30件）が最も多かった。また、Word、Excel、PowerPointなどのOfficeアプリケーションの使い方（26件）、Teams、Zoomの使い方（24件）、ネット配信授業（21件）、DoKoDeMoプリント（本学の印刷システム）、DoKoDeMo PC（LC内の貸出ノートパソコン）の使い方（21件）、授業で使われる学修支援システム「DUET」、授業支援システム「e-class」の使い方（19件）のほか、メールの書き方や送り方（6件）、学内の無線LANの接続方法についての質問（4件）も寄せられた。

相談内容の詳細をみると、レポートや課題、書類をDUET、e-class、メールなどに添付して提出する方法についての相談が一定数ある。ネット配信授業が定着し、課題や書類も手渡しではなくオンライン上で提出する場面が増えたことが影響しているとみられる。2019年度から珍しくなくなったOfficeアプリケーションや印刷システム、ネット配信授業にまつわる相談も、大学での学びと切り離せない事柄として今後一層相談の割合が増すと予想される。

4. おうち De LC 学習相談（オンライン）利用状況

次は2021年度のオンライン相談の利用状況について報告する。

2021年度は延べ34名の学生がオンライン相談を利用した（図1）。そのうち20件が今出川校地で学ぶ学生（文学部、社会学部、商学部、政策学部、グローバル地域文化

学部、グローバル・スタディーズ研究科)からの相談だった。オンライン相談利用学生の総数は前年度(延べ92名)より約36.9%低下し、対面相談よりもはるかに少ないが、留学生が海外から利用したり、今出川校地で学ぶ学生がラーネット記念図書館LCの教員にプログラミングの質問をしたりと、空間に制約されないオンラインの利便性が効果的に活用された。

両校地のLCでは、対面相談時にICカードリーダーで相談学生の学生証を読み取り、学生の所属や身分、学生IDを自動的に収集している。オンライン相談は学生証を読み取ることができないため、手動で情報を入力している。学年の記入漏れがあった場合は「その他」に分類される(図2)。学習相談を利用した学生の情報はデータの蓄積のためにも正確に記録すべきだが、複数の相談が来て立て込んでいるときは聞き逃すこともあれば、コミュニケーションがうまくとれず書き間違えることもある。今後は、専用フォームを作成し、相談前に専用フォームに学生自身が情報を記入してから相談を開始するなど、手動入力の不備を補う方法を模索していきたい。

図3をみると、オンライン相談の内容は「特定の科目の学び方」、「論文の書き方」、「レポートの書き方」の順で多かった。「特定の科目の学び方」は大抵が理工学部、文化情報学部など京田辺校地で学ぶ学生からの質問だった。内訳はデータサイエンス、プログラミング、実験方法、統計などの相談である。中には、良心館LCにて対面相談を利用した商学部の学生に対し、相談内容に沿ってラーネット記念図書館LCのLAを紹介し、生命医科学研究科のLAがTeamsを使って対応したケースもあった。校地間の横断的な連携のもとで相談対応をした好例である。

オンライン相談は、Teamsチーム「おうち De LC ポータル」²のオンライン相談専用チャンネルにて行うビデオ通話による相談とチャットによる相談、Webフォームによる相談という3つの方法で実施している。Webフォームによる相談は、学生が専用フォームに質問を記入したら、後日、回答をメールで送信する方法である。2021年度はTeamsビデオ通話による相談が28件、チャットによる相談が4件、Webフォームによる相談は2件だった。前年度はオンライン相談の約3割がWebフォームによる相談だったが、2021年度はビデオ通話が8割を超えた。ビデオ通話による相談が増えた要因として、学生にとってオンラインのやり取りが日常化し、ビデオ通話に対する抵抗が減ってきたからではないかと推測する。さらに、双方向オンライン型授業を受講するために手元にマイクやスピーカーなどを用意し、オンラインで双方向コミュニケーションがとれる環境を整えている学生が増えたことも考えられるだろう。

5. アカデミックサポートエリア周知のための取り組み

良心館LCの2021年度の利用者数状況によると、コロナ禍が始まったばかりの時期に入学した2020年度生も他の年度生と遜色ない利用者数であることから、コロナ禍であってもLCの認知度については影響がなく、かつ学生にとってニーズのある施設であることがうかがわれるという（同志社大学学習支援・教育開発センター 2022）。現在、良心館LCは感染予防対策として一部エリアを除き発声、発話が禁止され、原則個人での自習のみ認めている。多くの学生がネット配信授業の受講や自習のために利用し、混雑する時期は総面積2,550㎡の規模を誇る空間が学生で埋まることもあった。一方で、仲間と議論し合いアウトプットできる場所を提供するという本来の役割を果たせていないことも実情である。仮にLCを広々とした自習スペースとしか認識していない学生がいても致し方ない。

ASAは、多くのエリアの中でも入口から離れているほうで、3階に位置しているため、2階から入室する学生の視野には入りにくい。1年ぶりに春学期開始と同時に対面相談を開始したこともあり、ASAがどんな場所なのかを改めて周知する必要性を感じた。そこで、LCを利用したことがない学生はもとより、LCを自習でのみ利用している学生、自宅でネット配信授業を受け、オンラインで情報を得る学生などにもASAと学習相談の存在が知れ渡るよう、LC内外で周知することを試みた。これまでは主にLC内や周辺の掲示板に宣伝ポスターを掲示し、立て看板を設置してきた。2021年度はこれまでの周知方法に加え、以下のような取り組みを行った。

5.1 SNS運用

LCの公式Instagramアカウントは2020年度に開設し、LAが主体となって運用している（図4）。2021年度はさらに更新頻度を増やし、発信に力を入れた。

LCの公式Instagramは、投稿内容の決定からデータの作成、アップロードまで、すべて両校地のLAが主体となって行っている。Instagramは処理に時間がかかる文字情報よりも、圧倒的に速く処理できる写真と動画がメインの「非言語メディア」であり、ほかの



図4 LCの公式Instagram

SNSと比べて平均滞在時間が長いと言われているが、理由として、投稿からの外部リンクがないことが強く働いているという（山田ほか 2016）。Instagramのキャプション（画像や動画の下に表示される説明文）は、TwitterやFacebookと違いURLをタップして外部サイトに移動するという機能が制限されている。その代わりに、情報を視覚的に収集することに特化しているという点を活かした。相談対応をしているLAのプロフィールや助言可能な内容、シフト、LAが撮影したキャンパスの写真、活動の様子、LCで開催しているイベントの案内などをInstagramに掲載する際は、ASAがどんな場所か、LAにどんな相談ができるかをできるだけシンプルに、視覚的に伝わるよう工夫した。公式Instagramアカウントの宣伝活動も積極的に行った。InstagramのアカウントをQRコード化して両校地のLCにて掲示したり、利用学生にQRコードを配布したりして周知を図った結果、前年度は20名弱だったフォロワー数が、2021年度に2倍以上増加した。

5.2 オンラインサポート案内会

オンラインサポート案内会は2021年の3月末と4月の第1週目の計3日間開催した対面イベントである（図5）。両校地に特設ブースを設置し、自宅からも利用可能なオンラインサポートを中心に、キャンパスを訪れた学生に両校地のLCの紹介やASAが行っている学習支援について案内をした。4月の実施日は新入生のオリエンテーション期間に合わせ、履修登録のためにキャンパスを訪れた新入生や、コロナ禍の最中に大学に来る機会が少なかった2年生以上の在学生への参加を呼びかけた。

当時は新型コロナウイルスの影響でオンラインでのサポートやオンラインツールの利用が急増した。各種窓口も閉鎖したため対面で説明を受ける機会が減り、そんな状況に慣れないまま2021年度を迎えた学生も多かったのではないだろうか。同志社大学の公式ホームページには、シラバス、ネット配信授業の種類と受講方法、教科書の購入方法、授業で使用するシステムの利用方法が詳しく記載されており、解説動画も掲載されている。しかし、情報量が多いとうまく理解できず、見るのをやめてしまう、知ることを諦めてしまう学生がいるのではないかという懸念があった。オンラインサポート、オンラインツールはよく非対面で周知を図



図5 オンラインサポート案内会ポスター

り、チュートリアルも非対面で行われることが多い。本イベントでは、非対面サポートやツールの案内をあえて対面で行うことで学生への直接的なアプローチを試みた。

イベント当日は、ブースの横に大型モニターを設置し、スマートフォンの画面を表示させ、TeamsやDUET、e-classなどを操作する様子を見せたり、学習支援・教育開発センターが主催したオンラインイベントのオンデマンド配信動画を中継したりして通りすがりの学生の目に留まるような仕掛けを施した。ブースに立ち寄った学生には、おうち De LC ポータルの案内をはじめ、大学で学ぼうえで参考になるようなウェブサイトやQRコード化して配布し、自宅でも利用できる電子書籍を紹介した。教員およびアカデミック・インストラクター、LAは学生と一緒に画面を見て、利用手順を目の前で実践しながら説明した。対面だからこそ対応する側としても学生の様子や反応を見ながら案内することができ、学生は分からないことがあったらその場で質問できるという利点があった。

本イベントでは、普段ASAで行っている対面での学習相談もその場で受け付けた。例えば、学内LANの接続方法が知りたいという疑問がきっかけで、大学での学びについての不安やレポートの書き方、文献検索の方法などの相談になるケースもあり、自然にASAの利用を促すことができた。

5.3 日本語ライティングサポートWEEK (Japanese Writing Support WEEK)

日本語ライティングサポートWEEK（以下、JWSと略す）は、2021年度秋学期に実施した、本学の大学院に在籍する留学生を対象としたイベントである。詳しい開催期間及び利用人数、相談内容などは大谷・趙（2022）を参照されたい。

法学部・法学研究科では、本学と協定大学にそれぞれ一定期間修学のうえ、履修単位をはじめとする全要件を満たすと双方の大学から学位を取得できるダブル・ディグリープログラム³を実施している。ダブル・ディグリープログラムで来日した外国人の大学院生の中には、修士論文を日本語で執筆する場合がある。法学研究科の学生以外にも、入国制限によって来日できず、教員に日本語で指導を受けたり、チューターに日本語チェックを受けたりする機会が減り、日本語での研究や論文執筆が円滑に行えていない留学生のために、ASAと学習相談の周知も兼ねて本イベントを企画した。

ASAでは学生の主体的な学びを奨励しているため、課題の答えを直接教えることや、具体的な作業代行はしていない。学習相談において日本語チェックを行うときもあくまでも助言をしており、いわゆる赤入れは行わない。JWSでは、日本語母語話者や日本語で学位論文を執筆した経験者の立場から表現や文法的な間違いを修正し、適

切な言葉を書き入れるなどして直接添削を行った。大学院生をサポートの対象としたことから、学術的な文章の添削を行う中で、文法や表現の修正にとどまらず、文章の整合性や研究内容まで踏み込んで議論する場面も出てくる。そのようなときは留学生にJWSと学習相談の違いを説明し、学習相談に切り替えて対応した。JWSで添削を受けた後は、留学生自らが間違いやすい文法や表現を見直し、応用して文章を書くよう促した。

本イベントは14日間という短い間の開催だったが、リピーターの割合や相談内容は、ライティングセンターがない本学において、このようなサポートを必要とする留学生が存在することを示唆している。添削サービスではなく自主的な学びをサポートするというスタンスとして、ASAでライティングサポートを実施する意義があると考え、いくつか残された課題を改善し、今後も実施できることを望んでいる。

5.4 LAに相談してみようボード

付箋を利用したLAに相談してみようボード（以下、付箋相談ボードと略す）は、ラーネッド記念図書館LCにて相談対応を行っているLAが考案した。具体的には、ラーネッド記念図書館LCの入口前にボードと付箋、ペンを設置し、学生がLAに質問したいことを付箋に書いてボードに貼れば、LAが回答を作成して貼るという企画である。2021年度春学期にラーネッド記念図書館LCで付箋相談ボードを設置して間もなく、さまざまな学部・学年の学生から質問が貼られるようになり、短期間でボード一面が付



図6 ラーネッド記念図書館LCと良心館LCの付箋相談ボード（左がラーネッド記念図書館LC、右が良心館LC）

箋で埋め尽くされた。そこで、ラーネッド記念図書館LCのアカデミック・インストラクターからの提案で2021年度秋学期から良心館LCの入口にも付箋相談ボードを設置した(図6)。ASA付近ではなく、LCの外に設置したのは、普段LCを利用しない学生への利用を促す仕掛けでもあった。

付箋相談ボードには、学習、進路、就職活動、友人関係、人生の悩みなど、あらゆる相談が寄せられた。同志社大学には、キャリアセンターやカウンセリングセンター、スチューデントダイバーシティ・アクセシビリティ支援室など、状況別で学生が相談できる窓口が設けられているが、どの窓口にも当てはまらない悩みもあるだろう。付箋相談はそんなあいまいな悩みが貼られることもあり、一定数の学生が抱える悩みや不安の一端がうかがえた。

付箋相談ボードの設置はLAにとっても良い取り組みだった。相談件数が少ない閑散期に付箋相談が貼られるとLAのモチベーションにも繋がり、今、学生が抱えている悩みを知ることができ、今後の相談対応に備えるきっかけとなった。

付箋相談ボードが好評を得たのは、LCに入らなくても良いため敷居が低く、匿名性が高いという点に加え、口頭でのコミュニケーションをとる必要がないという点が理由として挙げられよう。コミュニケーションが不要であることがメリットになるのは、学生との対話の中で解決策を考えるという方法で相談対応をしている身からすると複雑な気持ちではあるが、多様な学生に、多様な支援の方法を講じることで、学習相談へのアクセシビリティも高めることができる(趙・矢内 2021)ということを意識し、今後もこのような創意工夫を重ねていきたい。

6. まとめと今後の課題

以上、2021年度に実施した良心館LCにおける学習相談やその他の取り組みについて報告した。良心館LCの対面相談とオンライン相談の利用学生数をみると、前年度からLCの利用者数とともに回復を見せている。相談内容の傾向をみると、レポートに関連する相談と、相談内容を分類した既存の項目に当てはまらない相談の件数が際立っていることが分かる。2021年度はSNSの運用やオンラインサポート案内会とJWSの開催、付箋相談ボードの設置などを行った。これらを実施するにあたって、いかに効果的にASAや学習相談の認知度向上と利用促進ができるか、LAによって数々のアイデアが出された。LCの外にいる学生がLCの中にあるASAを訪れるのを待つのではなく、LAをはじめ教員およびアカデミック・インストラクターが、ASAを離れLCの外に出

ていき、直接学生にASAの利用を呼びかけるという雰囲気が形成された。2022年度もLAが企画したさまざまなイベントが予定されている。

今後検討すべき課題として、相談内容の分類方法や、良心館LC内外での取り組みとASA利用との結びつきが挙げられる。2015年度に「レジュメの作り方」という項目を追加して以来、良心館LCにおける学習相談の内容を分類するために設けている項目は変更しておらず、これまで想定していなかった相談内容は一律で「その他」に分類している。前述したように1回の相談で扱った事柄が複数に渡るケースもあるが、2021年度は特定の項目に偏重している。6年間同じ項目で集計をとっているため、推移を追うことは容易であるが、分類基準や集計の方法を見直すと、時代とともに変化する学生のニーズを可視化することができるのではないかと考える。もちろん、過去のデータとの整合性の関係もあるため、慎重に進める必要があるだろう。

次に、良心館LC内外での取り組みとASA利用の結びつきについても改善の余地がある。良心館LC内外で実施したイベントの参加学生や付箋相談ボードを通じてASAの存在を知った学生がASAを利用しているとは限らない。良心館LC内外での取り組みがASAや学習相談の利用促進に直接結びついているかどうかを具体化すれば、より効果的な宣伝活動ができ、ASAを活性化させることができるだろう。このような課題に対応すべく、2022年度から良心館LCでは、はじめて学習相談を利用する学生を対象に、相談に来たきっかけを尋ね、集計をとって改善を施している。

2021年度はさまざまな試みがなされたが、特に付箋相談ボードは、悩みを抱えていながらもASAの存在を知らない、知らない相手と話をするのは緊張するなど、何らかの理由で学習相談を利用しない学生のための相談窓口として機能することが期待できる。学生一人ひとりの多様なニーズをきめ細やかに把握し、柔軟に対応することがより一層求められる時代となった。このような時代において大切にされることをASAも意識し、柔軟に対応すれば、本学が推進しているダイバーシティの視点に立った学習支援にも繋がるだろう。

付記

本稿で使用したデータは、同志社大学学習支援・教育開発センターの許可を得て使用した。

文献

- 趙智英・矢内真理子, 2021, 「コロナ禍における学習相談のあり方——オンラインと対面の並行による学習相談の有効性と課題」『同志社大学学習支援・教育開発センター年報』12: 18-29.
- 同志社大学学習支援・教育開発センター, 2022, 『CLF report (同志社大学学習支援・教育開発センターレポート)』33: 9.
- 同志社大学ラーニング・コモンズ公式ホームページ(最終閲覧日:2022年4月25日, https://ryoshinkan-lc.doshisha.ac.jp/usage/academic_support_area.html)
- 同志社大学法学部・法学研究科公式ホームページ(最終閲覧日:2022年4月25日, <https://law.doshisha.ac.jp/plp/program/overview.html>)
- 岡部晋典・鈴木夕佳, 2014, 「同志社良心館ラーニング・コモンズ揺籃期の一年——アカデミック・インストラクターの視座を通して」『同志社大学図書館学年報』39: 69-77.
- 大谷紗也加・趙智英, 2022, 「コロナ禍における国内外の留学生を対象とした日本語ライティングサポートの実践報告」『同志社大学学習支援・教育開発センター年報』13: 44-47.
- 山田智恵ほか, 2016, 『できる100の新法則 Instagramマーケティング——写真1枚で「欲しい」を引き出す技術』
- 吉野寿紀ほか, 2022, 「アカデミックサポートエリアにおける学習相談の多次元比較」『同志社大学学習支援・教育開発センター年報』13: 23-34.

注

- 1 「同志社大学ラーニング・コモンズ公式ホームページ」 https://ryoshinkan-lc.doshisha.ac.jp/usage/academic_support_area.html (最終閲覧日:2022年4月25日)
- 2 2020年7月から運用を開始したTeamsチーム「リモート勉強室@おうち De LC」を2021年度に「おうち De LC ポータル」に改名した。当チームはLCのオンラインサポートを一元化したもので、オンライン相談のほか、アカデミックスキルセミナーを双方向リアルタイムで受講したり、LAが企画したオンラインイベントに参加したりすることができる。
- 3 「同志社大学法学部・法学研究科公式ホームページ」 <https://law.doshisha.ac.jp/plp/program/overview.html> (最終閲覧日:2022年4月25日)